

## 「第16回国際ガン類専門家会議に参加しました」

平成26年11月22日～25日に中国科学院生態環境研究センター（中国・北京）において、第16回国際ガン類専門家会議が開催されました。ロシア、オランダ、モンゴルなど13カ国から37名のガン類研究者が集まりました。日本からは嶋田を含めて5名参加しました。

初日に、東アジアと世界のガン類の生息状況と保全管理、2日目以降に種別に議論が展開されました。嶋田はコクガングループで、「東日本大震災がコクガンの越冬分布に与えた影響」と「衛星追跡はコクガンの越冬分布、移動、春の渡りの一部を明らかにした」の2本の口頭発表を行いました。今回、私たちの研究グループでは、春の渡りの途中までしか追跡できませんでしたが、ぜひともコクガンの渡り経路を明らかにしてほしいと励ましの言葉を多数いただきました。

アジア地域のガン類は、欧米と比較すると研究や基礎データの蓄積が進んでいません。今回の会議では、こうしたアジアのガン類の生息状況を総括し、問題点を抽出する上で有意義な会議でした。また、アジア地域のガン類に関する情報不足解消のため、種別のレビューと課題の抽出をすることが決まり、私はコクガン担当となりました。そして論文でしか名前をみたことのなかったガン研究の大家に会えたことも嬉しかったです。

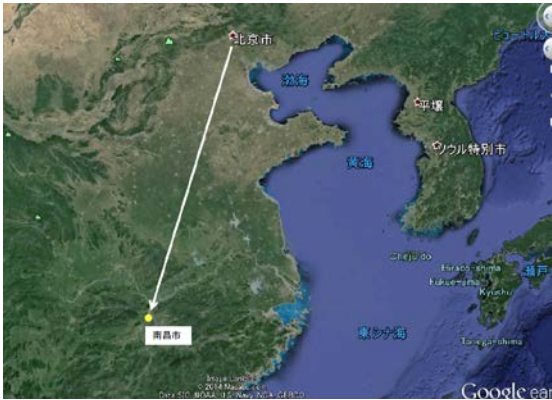
研究センターにこもりきりの会議でしたが、25日午後からは飛行機で2時間かけて江西省南昌市に移動し、中国最大の淡水湖であるポーヤン湖でエクスカージョンを行いました。ポーヤン湖の面積は雨季に5000km<sup>2</sup>、乾季に1000km<sup>2</sup>と、1年間に琵琶湖6個分ほどの面積の増減があります。絶滅危惧種のソデグロヅルをはじめ、クロヅル、サカツラガン、ソリハシセイタカシギの群れなどが、茫漠たる湿地を自由に行き交って活動していました。進化史上この鳥たちがあらわれて以降の、本来の暮らしぶりを垣間見ることができ、とても感動しました。また、こういう場所が地球に残っていることに感謝の気持ちでいっぱいとなりました。



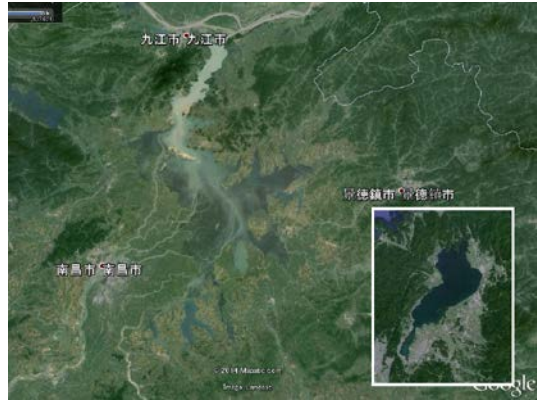
発表の様子



ガン研究の大家 Fox 博士（中央）と Cao Lei 博士（右）とともに



北京市から南昌市へ



同じ縮尺でポーヤン湖と琵琶湖を比較



ソデグロヅルの群れ



ソリハシセイタカシギ



ヘラサギの集団採食



夢中で鳥見